

参考資料：枝廣淳子

前回の基本問題委員会での問題提起「エネルギー政策と倫理」とコメントに対する国民の思い・考え(寄せられたメールから、ご本人の了解を得て抜粋)

日本の国民の半数以上が脱原発でも良いと思って、自分たちでもできる場所は節電に頑張っているにもかかわらず、政府の考え方が国民からどんどんと離れていることを危惧しています。

私はしっかりと働いて、税金を納め、東日本大震災からの復興をサポートしようとしていますが、やはり政府は経済優先しか考えていないように思えてなりません。人間の命よりも。本末転倒ですが。

=====

枝廣さんの指す「倫理」と、他の委員の方の「倫理」には議論している内容に認識の違いがあるように感じました。

倫理の議論が個人的問題に矮小化され全体的議論が避けられるのは、これまでされてこなかったので枠組のようなものがないからかもしれません。

まず、議論したい倫理とは何かについて、概念的に認識を共有すると議論が進みやすいのではないかと考えました。

「倫理的」とは、「感情的」とか「情緒的」ということとはまったく異なるもので、『現在も含めて将来の世代に向けて、我々が適切に責任を取れるかどうか』という基本問題の議論です。倫理の問題はなにか結論があってそれを見つげるとか、会得するという類いの話ではなくて、倫理的側面が国民的議論になって一人でも多くの人間が倫理について議論すること、その行為自体に意味があるように思います。

=====

基本的には、倫理的観点からの考慮がなされるべきだと思います。

これまで、日本をはじめとする資本主義国家が経済を第一優先とし、突っ走ってきました。その過程においては、倫理的な側面を軽視してきたように思います。それは、経済が発展するためには、多少の犠牲は仕方がないという考え方だと思います。

原発に限っていえば、その犠牲は人命になる可能性があります。これは、やはり倫理的側面からみると、あってはならないことです。

=====

東電福島第一原発事故で、いったいどれだけの人が家を追われ、放射能に怯える生活しているのか、どれだけの第一次産業従事者が放射能のために生活が立ち行かなくなっているのか…

この深刻な実態を、今後のエネルギー政策に反映する必要があります。

それでなければ、福島県をはじめとする人々に本当に申し訳ないです。

=====

朝日新聞の社説でポルトガル語講師の方が、「ネットのブラジル人向けの求人誌に福島でのがれき処理の人材募集がポルトガル語で掲載されていて、事故処理に他国の人まで巻き込む原発など、早期に廃止すべきだ」と書かれていたことを思い出しました。私も同感です。

世界中から高額な義援金をいただいたり、技術協力をしていただいたり、メッセージをいただいたり、お世話になる一方で、外国人のかたに、発電所から 20 キロ圏内は 1 日 2 時間で 3 万円のような、高額な報酬のかわりに危険でつらい仕事をさせるのは非人道的で間違っていると思うのです。

=====

例え一時的にお金がかかろうと、我々の、また次世代の安全を第一に考えるべきではないのかと思います。

事故は起きないということで今までやってきて、そしていざ事故が起きたにしても、今度は大丈夫だ、と言ってまた同じ事を繰り返している、そんな気がします。

そこには、もう事故は起こらないという、不都合なことを見ないという心理が働いているように思います。

今までお金をつぎ込んできたのだから、このままやめると今までのお金は無駄になるというような論理も聞かれます。今のままで進んでいったのでは、今後もっと大きな痛手を負うかもしれないと考えた場合、やめる勇気が必要なのだと思います。

=====

放射性廃棄物は、未来世代への押し付けとしか思えません。今の世代が享受する電気に対し、将来世代は危険な毒物を受け取るという仕組みなのですから。

同じように、原発の立地地域と都市部との関係があります。いざ地震になったとき、もしまた想定外のことが起これば、被害を受けるのは今回の福島のような原発立地地域で、そこから電気を享受していた都市部と、落差を感じます。

このように考えることを「感情的」と言われるのは、現実の経済の実態にそぐわないこと、つまり、原発の廃止を求めるからなのだと思います。倫理的に考えると、原発はやはり、廃止するということにどうしても結論がいきます。稼働の立場の人たちは、現在の経済を維持するには、どうしても原発が必要という結論になるのだと思います。互いに最終的な結論の形が違うので、平行線をたどるのかもしれませんが。

未来の人たちや、原発立地地域の人など、ほかのだれかを犠牲にして成り立つことが、倫理に反しないと言えるのでしょうか。